

多言語国家スリランカの言語使用状況
—シンハラ語話者とタミル語話者のコードスイッチングにおける
「親しい間柄を呼ぶときの CS」について—

サジーワニー ディサーナーヤカ
(千葉大学人文社会科学研究科特別研究員)

1. はじめに

筆者は、拙論『多言語国家スリランカの言語使用状況—シンハラ語話者とタミル語話者のコードスイッチング—』(以下「博士論文」)において、シンハラ語話者の家庭およびシンハラ語話者とタミル語が混在する家庭でのそれぞれのコードスイッチング(以下「CS」)戦略の違いを明らかにした。

すなわち、シンハラ語話者の家庭では、シンハラ語の語彙があるにもかかわらず、親子の間でも英語に CS している側面を、植民地宗主国の言語であり世界の共通語である英語と、母語であり日常言語であるシンハラ語という言語ヒエラルヒーの構図と捉え、その典型的な側面が「権威を付与された言葉に対する CS」で英語が使用されるものとした。

一方、シンハラ語話者の家庭及びシンハラ語話者とタミル語が混在する家庭では、英語>シンハラ語>タミル語という言語ヒエラルヒーが家庭内で崩され、そこでは、言語アイデンティティーへの力が働いているとした。

筆者は、2種類の家庭にはこのような根本的な違いが存在するにもかかわらず、いずれの家庭においても家族のメンバーを呼ぶ際には、母語を使用するという共通の特徴があることに注目し、「親しい間柄を呼ぶときの CS」として新たな CS の機能を定義した。(参考資料 1: 「親しい間柄を呼ぶときの CS」の会話データを参照されたい。)

さらに、①スリランカでは、シンハラ族→シンハラ語→仏教、タミル族→タミル語→ヒンズー教という図式が成立していること、②この図式にもかかわらず、シンハラ語話者とタミル語話者に共通して、父母を尊敬し、家族を愛する教えが受け継がれているという前提のもとに、この「親しい間柄を呼ぶときの CS」には、スリランカ特有の宗教的背景があるものと推測した。(参考資料 2: 「博士論文の概要」 p21 「親しい間柄を呼ぶ時の CS」を参照されたい。)

また、この推論の正当性については、より詳細な実証研究が必要であるとして今後の課題の一つに掲げている。(参考資料 2: 「博士論文の概要」 p23 「8.今後の課題」を参照されたい。)

2. 本論の考察課題

本論では、『多言語国家スリランカの言語使用状況—シンハラ語話者とタミル語話者のコードスイッチング—』で掲げた課題のフォローアップとして、「親しい間柄を呼ぶときのCS」にはスリランカ特有の宗教的背景があるとの推測について、より詳細な調査を行うことにより、その正当性を検証する。

3. 調査方法

3.1 インタビュー調査

本年1月6日～1月12日にかけて、スリランカで家庭における会話について、西部州に住んでいるシンハラ語話者とタミル語話を調査対象者にインタビュー調査を実施した。

3.2 質問項目

インタビュー調査における質問項目は以下の通りである。

- (1) 普段は家でどの言語を使用しているか？
- (2) 家族のメンバーとコミュニケーションをする際にどの言語を使用しているのか？
- (3) 家族のメンバーを呼ぶ際に特にどの言語を使用しているか。
- (4) 母と父を呼ぶ際に特にどの言語を使用しているか。

3.3 調査対象者

調査対象者とその属性は以下のとおりである。

3.3.1 シンハラ語母語話者の家庭

参加者	性別	年齢	出身地	居住地域と宗教	学歴	所属（職業）
SF1	女性	68	西部州	西部州、 仏教	大学	退職者
SF2	女性	44	西部州	西部州、 仏教	専門学校	主婦
SF3	女性	37	ウバ州	西部州、 仏教	大学	教師
SF4	女性	53	南部州	西部州、 仏教	高校	銀行
SF5	女性	34	西部州	西部州、 仏教	高校	主婦
SF6	女性	44	サバラガムワ州	西部州 仏教	短期大学	商売
SM1	男性	43	西部州	西部州、 仏教	大学	公務員
SM2	男性	45	サバラガムワ州	西部州 仏教	高校	ビジネスマン
SM3	男性	47	南部州	西部州 仏教	大学	医者
SM4	男性	38	西部州	西部州 仏教	高校	郵便局

3.3.2 タミル語母語話者とタミル語母語話者が混在する家庭

参加者	性別	年齢	出身地	居住地域と宗教	学歴	所属（職業）
TF1	女性	66	ウバ州	西部州、ヒンドゥ教	大学	退職者
TF2	女性	34	中部州	西部州、ヒンドゥ教	専門学校	主婦
TF3	女性	37	西部州	西部州、ヒンドゥ教	大学	医師
TM1	男性	51	ワヤバ州	西部州、ヒンドゥ教	高校	ビジネスマン
TM2	男性	44	ウバ州	西部州、ヒンドゥ教	高校	公務員

4. 調査結果

4.1.1 シンハラ語母語話者の家庭

SF1

私の主人と私は結婚したころから、シンハラ語と英語、両方の言語で話しています。家族のメンバーに向かって話しかける時にはシンハラ語を使います。シンハラ人の子供が赤ちゃんの時に最初にしゃべる言葉は「amma」という言葉です。うちの子供達が生まれてからも「amma」という言葉をとて大事に使っています。父を呼ぶ時もシンハラ語で「taththa」と呼びかけています。

私の家庭では子供たちが小さいころから、シンハラ語と英語両方の言語で話していますが、私を呼ぶ際にはいつも「amma-」とシンハラ語で呼んでいます。シンハラ人は母を呼ぶ時に「amma-」とシンハラ語で呼ばなかったら文化的にも社会的にも伝統的にも母に対する愛がなくなると思います。私の子供が私に向かって「amma-」と呼ばずに「mother」「mama」と呼んだら、愛情がこもっていないように感じます。

SF2

家族の中ではシンハラ語と英語の両方の言語を使って話しています。私の家族で母、父、姉、兄、妹、を呼ぶ時にシンハラ語を使用します。その中でもお母さんは私にとって大切な宝です。シンハラ人にとって母を呼ぶ時に母語以外の言語で呼べば、母に対する本当の愛が表せません。心から母を呼ぶ時に、「amma-」と呼ばないと本当のニュアンスが伝わりません。母親ほど世界で愛している人はいないので。英語で「mother」と呼べば、他人を呼んでいるように感じます。私達はコミュニケーションをする時に、シンハラ語と英語で話すのが普通ですが、母を呼ぶ際には「amma」と呼びます。なぜなら、子供の時から「amma」と呼んでいるし、母に対する尊敬は他の言語では表現できないからです。シンハラ人が家の中では英語を使っている、家族の母だけではなく、父、姉、兄、弟、妹を呼ぶ時には必ずシンハラ語に言語を切り替えます。私達は生まれてから初めに話す言葉も

「amma」という言葉です。また、スリランカの文化では、子供が生まれてから4歳になる前に初言葉を読ませる、初言葉を書かせる行事があります。その時には、まず、「ア」文字を読ませて「amma」という言葉も読ませます。ですから、英語で話していても母を呼ぶ際にシンハラ語になります。

SF3

家で普段話す時には、シンハラ語と一緒に英語もよく使用しています。結婚する前に家にいたころ両親や兄弟姉妹と一緒に両言語で話していました。家族の子供と話している時でも両言語で話します。両言語で話していても、母、父と話す時は母語シンハラ語で母を「amma」父を「taththa」と呼ぶのが普通です。英語で話す時でも母に対して「mother」と呼びません。また、父に対しても「father」と呼ばないのです。シンハラ人の子供達は小さい時から母に対して「amma」という言葉に慣れています。「amma」に対して「amma」以外の言語では呼べないのです。私には一人の娘しかいませんが、娘が私に向かって英語で「mother」と呼んだら違和感があり、愛情の度合いが小さくなるように思います。

SF4

私は子供のころは両親と一緒にシンハラ語だけを話していました。今は私達の家庭ではシンハラ語と英語の両方の言語を使っています。子供達が私と主人と一緒に話をする時も英語とシンハラ語を同じように使っています。私の子供はシンハラ語と一緒によく英語を使っていますが、私を呼ぶ時に「mother」と呼びません。全ての会話を英語で話していても私を呼ぶ時にも主人を呼ぶときにも「amma」「taththa」と母語で呼びます。それは、子供が小さい時から父と母を呼ぶ言葉として自然に慣れるようになっているからです。「amma」「taththa」と言うシンハラ語の単語が小さい時から耳に入る初めての言葉として、子供達が大人になっても言葉を変えずに使います。スリランカ人は宗教から考えても、習慣的に考えても、歴史的に「amma」という言葉が変わっていません。もし、私の子供達が私を呼ぶときに英語で「mother」「mama」と呼んだら、違和感を覚えます。

SF5

私は両親と住んでいた時に、家でシンハラ語と一緒に英語を使用していました。シンハラ語と英語で会話をしていても子供の時から母と父を呼ぶ時に母と父に対してシンハラ語で「amma」「taththa」と呼んでいました。スリランカの社会では、母語シンハラ語より英語の使用頻度が高いです。どこに行ってもコミュニケーションをする時には英語を良く使用しています。スリランカ社会では、親戚関係、特に親子の結び付きが強く、母と父は一番大事にします。そのため、いつも英語を使っても母と父に対しては英語で「mother」「father」と言いません。「amma」「taththa」という言葉しか話せません。私の子供は、インターナショナルスクールに通っています。娘は英語とシンハラ語を良く使用しています。

学校で私のことを先生か友達に説明する時に「my mother」と言いますが、学校にいても、家にも「amma」と呼びかけします。その言葉は一生変わりません。もし、英語で mother と呼んだら大きなショックを受けます。シンハラ語の「amma」という言葉には、母に対する愛がその言葉自体にまるまる入っています。

SF6

私は結婚する前に、田舎に住んでいました。家にいた時は、両親と主にシンハラ語で話していました。シンハラ語に英語を混ぜる場合もありましたが、母と父を呼ぶ時には一度も英語で呼んだことはありません。母に対して「amma」と呼ぶしか他の言葉は浮かびません。スリランカの社会では、母を呼ぶ時に「ammi、amma」父を呼ぶ時に「taththa、tathti、appachchi」と呼びます。もし、私の子供が、私を呼ぶ時に「mami、mother」と呼んだら母に対する感謝、尊敬、愛がなくなるような感じになり、大きなショックを受けます。いくら英語で会話をしている、私を呼ぶ時にシンハラ語で「amma」と呼んでほしいです。

SM1

私は、実家にいた時ははと父、母、兄弟と一緒にシンハラ語母と英語で話していました。両親も勿論ですが、家族の弟達と妹に向かって呼びかけをする時には英語を使用しません。英語で話していても話の中で、父には「taththa」、母には「amma」と呼びかけます。家の中では母親が私達にとって家の仏様と同じ存在です。スリランカの社会ではどの話者でもどの宗教を信じていても母に対する愛情は同じだと思います。母を「mother、mami」のように英語で呼ぶと母に対する愛がなくなると思いますし、文化の違いを感じます。母を尊敬し、母を愛する言葉として「amma」というシンハラ語の言葉がとても大事です。私はどんなに英語で話しても、母に向かって呼ぶ時に「amma」としか呼びたくないです。

SM2

私はサバラガムワ州で生まれ育ちました。小さいころから家族全員でシンハラ語と英語を使っていたのですが、両親と兄弟を呼ぶ時に英語で呼び掛けはしませんでした。今でも母と父に向って話しかける時に母語シンハラ語で「amma」「taththa」と呼びます。大人になっても結婚しても母と父を愛しています。結婚しても両親との関係が無くならないし、母と父を尊敬する心も一生変わらないです。家族の中で母という人間が大切な宝です。母がいないとこの世界はありません。私達の宗教・仏教では、母が家の中の仏様だという教えがあります。母と父の足元で膝を床に付けて両手を合わせて拝む習慣もあります。したがって、母を呼ぶ時にシンハラ語で「amma」という言葉しか使えません。英語で「mother」と呼んだらシンハラ語の母という意味を表わせないのです。足元で膝を床に付けて両手を合わせて。

SM3

私は子供の時から、家庭では母、父、兄、妹を呼ぶ時にシンハラ語でした。私の家庭のメンバーが全員、シンハラ語と英語を使用します。母も父も医師です。子供の時から英語を頻繁に使用しました。しかし、家族の母と父を呼ぶ場合も兄、妹を呼ぶ場合もシンハラ語で呼び掛けします。母も父も家族を守ってくれる神様です。母を呼ぶ時に「**ammi**」と呼びますが、父を呼ぶ時にシンハラ語で「**appachchi**」と呼びます。母を呼ぶ時に「**amma**」という言葉しかありません。英語で「**mother**」と呼んだら母を尊敬し、感謝する言葉とはなりません。

SM4

私達の母語はシンハラ語ですが、普段家にいる時にも英語と一緒にシンハラ語を話すことは普通です。私は結婚する前から家の母、父、姉、弟を呼ぶ時にシンハラ語で呼んでいました。スリランカの社会では、母語と一緒に英語をよく使用していますが、家族のメンバーを呼ぶ際に英語で、「**mother、 father、 sister、 brother**」とは呼べないです。どの家庭でも同じです。私達の母は仏教徒で、父はキリスト教です。教会に行ってもお寺に行っても両親を尊敬することを教えられます。仏教では、母は家の仏様だと言われています。また、生まれた時から「**amma**」という言葉が耳に入ります。「**amma**」という言葉はとても大事です。母に対する愛情がその言葉全体に入っているのです。英語で「**mother**」と呼んだら意味が変わります。

4.1.2 シンハラ語母語話者の家庭のまとめ

どの調査対象者も家庭の中で母語シンハラ語と一緒に英語を使用することが明らかになった。また、どの家庭のメンバーでも、家族の母、父、姉、弟を呼ぶ際にシンハラ語で呼ぶという結果が多かった。また、調査対象者の話によると、スリランカの社会では母語と共に英語をよく使用していても、母と父に対する尊敬、感謝や心の中から出る愛を表す言葉が「**amma**」という言葉であった。赤ちゃんが自分の母に対して最初に話す言葉が「**amma**」という言葉であり、その言葉は成人してからも一貫して使用される。「**amma**」という呼称はスリランカ人にとって重要な価値を持っており、母語で呼ばず他の言語で母を呼ぶ事は、母子間の関係に心理的な距離を生じさせるだけでなく、スリランカ特有の習慣や文化が反映されない感覚を覚えさせるということがわかった。

4.1.3 タミル語母語話者とシンハラ語母語話者が混在する家庭

TM1

私たちの家庭では、タミル語、シンハラ語、英語の 3 の言語を使用している。妻がシンハラ人です。子供達も小さい時から 3 つの言語が話せるようになりました。

私達はスリランカの北部州のタミル語を使用しておりますが、私は、母を呼ぶ時にタミル語で「umma」と呼んで父には「wappa」と呼びかけます。家族のメンバーを呼ぶ時には母語タミル語を使用します。

私の宗教ヒンドゥ教では、母は神様と同じ存在であると言われていています。スリランカの社会では、宗教の違いにかかわらず母親を大切な人間として守っています。母を呼ぶ時に「mother」とは呼べません。タミル語で「umma」と呼ぶと母に対する愛が表せます。

TM2

私の父はタミル人ですが母はシンハラ人です。私達は小さい時からタミル語と英語で話していました。父の母の父（TM3 の祖父母）はタミル語話者です。私はウバ州で生まれて高校までウバ州のタミル人学校に通いました。学校では英語で授業をしましたので、私は学校の中ではほとんど英語とタミル語を使って会話をしていました。

父を呼ぶ時にタミル語で「appa」と呼んでいます。母を呼ぶ時にもタミル語で「amma」と呼びます。兄弟を呼ぶ時にもタミル語を使うのが普通です。家族の親戚も皆タミル人ですが彼らは母を呼ぶ時にタミル語で「amma」と呼びます。

私達は家を出る際に母と父の足元で膝を床に付けて両手を合わせて拝んでから出る習慣があります。それは、スリランカの社会ではシンハラ民族とタミル民族が同じ習慣を持っています。スリランカはどの話者でも母を大事にする社会になっています。母を尊敬する心を持っていて、本当の母という意味がタミル語の「amma」という言葉に入っています。英語で母に向かって呼びかけすることなどできません。

TF1

私はタミル人ですが、主人はシンハラ人です。私は子供のころからシンハラ語もタミル語も使っています。また小学校からシンハラ人学校に通っていました。大学もシンハラ語と英語を使用する大学でした。小さい頃は家の中で皆タミル語と英語を使いました。私の父はタミル人で母はシンハラ人です。しかし、祖父母と親戚は皆タミル人だったのでタミルと英語をよく使用していました。

家族の姉、妹を呼ぶ時にも、親戚のいとこたちを呼ぶ時にもタミル語で呼んでいました。母はあまりタミル語が話せませんので家庭の中はシンハラ語と英語も使用しました。親戚のいとこたちも母、父、兄弟、姉妹を呼ぶ時にタミル語で呼んでいたもので、私達の家族も

皆、母、父、妹、弟と英語で話しても、呼びかけする時にはタミル語を使用しました。

父にはタミル語で「appa」、母にはタミル語で「amma」と呼びます。父も母も家族の大事な宝です。母と父に対する愛情、感謝の大きさは測ることができません。特に母は世界中の何物にも比較することはできません。

スリランカではタミル人でもシンハラ人でも結婚して家を出ても母を大事にする習慣があります。世界は一人の人に一人の母しかいません。ですから母の大切さは言葉では表し切れないぐらいです。ですから、他の言語で母を呼ぶより母語で母を呼ぶ時に母に対する感謝、愛情が表せるのではないかと思います。

私の子供は家の中で、タミル語、英語をよく話していますが、私を呼ぶ時に「amma」しか使いません。もし、私の子供達が私に「mother、mama、mami」という呼び方をしたら文化的にも、習慣的にも違った社会になると思います。

TF2

私の母はシンハラ人ですが、父はタミル民族の家庭で生まれた人です。祖父母もタミル語話者でした。父がタミル語と同様にシンハラ語も英語も良く使っています。母の母語はシンハラ語ですが、父と出会った頃からタミル語を学んだそうです。私達が大きくなって、言葉をしゃべるようになると、家の中でシンハラ語もタミル語も使用していました。母も父もシンハラ語とタミル語と一緒に英語も話しています。私と兄は、母の母語も父の母語も必要なので小さい時からシンハラ語もタミル語も学びました。家庭の中ではタミル語と英語を話す機会が多いです。

しかし、父と母を呼ぶ時にタミル語で「amma」、「appa」と呼びます。家族の中で兄と親戚の姉妹を呼ぶ時にもタミル語で呼び掛けします。父は家族の一番大事な人ですが、母はそのより上の立場にいます。なぜなら、母がいなかったらこの世界はありません。世界のつながりのために母の大切さについて言葉では言い表すことはできません。どの民族でも母が一番の大切な宝です。英語で「mother」と呼ぶより、タミル語で「amma」と呼んだら母に対する愛情、感謝がそのまま表せます。

TF3

私は結婚する前から家の中ではタミル語と英語を使っていました。私の母はタミル人ですが、父はシンハラ人です。父はタミル語をあまり話しませんでした。祖父母がタミル民族でした。家庭では誰もが英語もできる人達だったので、英語とタミル語をメイン言語として話していました。父はタミル語が上手ではなかったため、私達と一緒によく英語とシンハラ語で話していました。私は兄と弟がいます。皆シンハラ語学校に通っていたので、学校ではシンハラ語と英語で授業を受けました。大学でもシンハラ語と英語を使用していました。家の中でだけ、三つの言語を使用しました。

母を呼ぶ時にタミル語で「amma」と呼びますが、父を呼ぶ時にシンハラ語で「tathta」

と呼びます。母が私達の父を呼ぶ時にタミル語で「appa」と呼んでいましたが、父はシンハラ人なのでシンハラ語で呼んだら喜んでいました。このことから、自分の家族のメンバーを呼ぶ時に母語で呼んだほうが親しい関係を適切に表すことができると思います。

私は、大学時代時に医学部で知り合ったシンハラ人の方と結婚しました。今の私の家族の中でもシンハラ語と英語をよく使っています。私の子供はまだ小学生ですが、国立学校に通っています。しかし、学校で全ての科目を英語で勉強しています。私の子供はタミル語がほとんどできません。子供は主人（父親）を呼ぶ時に「appachchi」と呼びますが、私を呼ぶ時にシンハラ語で「amma」と呼んでいます。スリランカの社会では、祖父母、両親をととても大事にする習慣があります。宗教に従って、家を出る時、夜寝る前に必ず両親の足元で膝を床に付けて両手を合わせて拝む習慣があります。仏教でもヒンドゥ教でも家の仏様は母、家の神様は母ということわざがあります。母をどのくらい大事だということはそれで分ります。母という言葉は英語で呼んでも本当の母という意味にはなりません。

4.1.4 タミル語母語話者とシンハラ語母語話者が混在する家庭のまとめ

タミル話者もシンハラ語話者と同じように家庭の中では、タミル語と英語を使用するという答えが多かった。タミル人はシンハラ人と結婚している家庭の調査対象者であったが、全員に、父と母の母語を両方使っているという傾向がみられた。インタビューの結果からみると、家庭の中でタミル語、シンハラ語、英語の三つの言語を使用している話者が多い。教育水準が高く、英語の使用頻度が高い医者や家庭でも、両親と兄弟姉妹に話かける時には英語を使わず、母語タミル語を使っている。仏教徒と同様に、タミル語話者も自分の宗教であるヒンドゥ教を信じて母と父を尊敬し拜んでいるという調査対象者が多かった。

今回の調査では、タミル語話者も、父を呼ぶ際にタミル語で「appa」と呼び、母を呼ぶ際に「amma」と呼ぶことが明らかになった。タミル語話者も、母に対する愛情、感謝などがそのまま伝えられるように、母語で母を呼ぶことが分かった。スリランカの社会では、英語を使用していても、母と父、兄弟姉妹に対する愛情をそのまま表すために母語で話し掛けていると考えられる。

5. まとめ

以上の結果を宗教との関係から考えてみると、多くのシンハラ人が信仰する仏教における「amma」という言葉の重要性を指摘することができる。仏教徒の家の仏様は、母親と見なされており、「gedara budhun amma」（家の仏が母である）という考え方があり。また、仏教では、母なるもの、つまり、何かを生み出すものに対する尊敬や愛情を大切にしており、その考え方も母親への呼び方に影響していると考えられる。しかし、「amma」とシンハラ語で母親を呼ぶ習慣は、仏教徒に限ったことではない。キリスト教のシンハラ語話者

にも、シンハラ語で母を呼ぶ習慣が見られる。これは、スリランカ社会全体で母親を尊敬し、愛情を表現する習慣、文化が共有されているためだと思われる。スリランカでは、キリスト教、仏教、ヒンドゥ教でも神を拝み、また母を拝むようにと教えている。母親への愛情を示すことは宗教を問わずスリランカ社会では重要なことであり、母をどれだけ愛しているが社会的な価値を持っている。「amma」という言葉には、他の言語にはない、スリランカ社会で共有されている価値が含まれており、「amma」と呼ぶことで心理的な親近感、スリランカ人としてのアイデンティティを創出・保持していると思われる。

参考資料 1

「親しい間柄を呼ぶときの CS」の会話データ

以下の会話データは博士論文に付した資料の会話データから「親しい間柄を呼ぶときの CS」に該当するデータを抽出したものである。データ番号は当該資料のデータ番号を示している。なお、下線はシンハラ語を、下線はタミル語を示している。

1. シンハラ語母語話者の家庭

データ 1

putha—duwa— why don't you have your lunch?
息子— 娘— お昼ご飯食べたら？

データ 2

お母さん
I told Amma cut it. (笑)
お母さんに切られたって言ったさ。

データ 3

お姉ちゃん— 教 えて
A k k i -kiyannako what happened at your school, anything interesting?
お姉ちゃん、教えて、学校はどうだった？何かおもしろいことはあった？

データ 5

今日 私たちは あるので 早 く 行きたいわ 他 の日 のように できません
Ada apata exam nisa ikmaninma yannaona. wenada wage late wennaba.
お母さん 今日も に 走らなければ
Amma, hurry up. I need my lunch packet quickly, please. adath bus ekata duwanna
なりません
wenawa.

今日、私は試験があるので早めに行きたいわ。他の日のように遅刻はできないの。お母さん、急いで。お願いだから私のランチを早くちょうだい。

データ 7

私 は 行きます
Amma, tatta-、 god bless you ! mama yanawa.

お母さん、お父さん 行ってきます

娘
Ok! god bless you too, duwa !

はい、行ってらっしゃい。

データ 10

Please amma(お母さん).

データ 12

息子 娘 急いで ください
puta, duwa, anyway be quick with your bathing, ikman karanna.

とにかく早くシャワーを浴びなさい。二人とも急いで。

お母さん-
Amma--, what's the film we are going to see.

お母さん、どんな映画をみるの？

お父さん
thanks taththi.

データ 19

お父さん
Please appachichi

データ 24

お父さん 私達 今 行きましょう
Leave appachchi alone we will go after a while. Api denmama y a m u

お父さんを一人おいて、私たちはもうすぐ行きましょう。

はい 姉 弟
Hari I will iron now. Akki and malli can you come here?

はい、すぐにアイロンかけますよ。二人ともここにいらっしゃい。

データ 25

Even ^{お父さん} appachchi is tired.

お父さんでも疲れる時があるのよ。

データ 28

Fools only call the others "fool ". ^{弟と一緒に喧嘩しないでください息子} Malli ekka randukaranna e p a pute.

バカと言う人がバカですよ。弟と喧嘩してはいけませんよ。

データ 42

^{ねーお母さん} Ane ammi ^{don't} be silly, I was badge top last semester, ^{それ以上何が必要なの} thawamonawadaooni.

ねー、母さん、そんなに心配しないで、僕は前期最優秀生になったんだよ、それ以上のことはないでしょ。

データ 43

are you doing any homework ^娘 duwa?

あなた、宿題をしているの。

データ 45

ok ok, ^{お母さん あなたは怒っているの お母さん} amma oyata taraha giyada, amma smile please.

分かったわよ、お母さん怒ってるの。お母さん、少し笑ってよ。

^{お姉さん} Gakki ,keep my sport news papers separate. ^{私の大好きなお姉さん} Mage hoda akkiyane

お姉ちゃんーのスポーツ新聞は別にしておいてよ。私の大好きなお姉さん。

データ 47

^{お父さん} Thatta, may I go to the musical show there on next Sunday? ^{よろしいですか} kamaknedda

お父さん、次の日曜日にコンサートがあるんだけど、行ってもいいかな。いいですか。

2. タミル語母語話者とシンハラ語母語話者が混在する家庭

データ 6

どうして おとうさん どうして おとうさん

mokoda tathte, enna appa

どうしたのお父さん、どうしたのお父さん。

データ 16

お母さん ラマー サリーヤ
amma, today I want to wear my new dress-, Lama Sariya-

お母さん、今日私は新しい服、ラマサリーを着てもいいかな。

データ 13

きみ も 行くん だろ う
An ningal adhukku Pohavillei? Why didn't you go with...

君も行くんだろ。(友だちと) 行ったらいいじゃないか。

娘 も 行って おい で よ
Duwatath, yanna puluwanne.

娘も、行っておいでよ。

データ 21

お姉さん お母さん
Akka, amma... helps to do our home work as well...a lot..neraya velei.

お姉さん、それにお母さんは僕たちの宿題も手伝っている。お母さんは山ほど仕事があるんだ。

I am sorry, appa, maniungal

ごめんなさい。おとうさん。本当にごめんなさい

データ 23

お母さん これ から お母さんにお手伝い しま す
I love you amma, Meeta passe ammata udau karanawa.

博士論文の概要

1. スリランカ特有の言語状況

多言語社会のスリランカでは日常的な言語の使い分けとして、マジョリティの言語であるシンハラ語、マイノリティであるタミル語に加えて、社会的上位にあると考えられる英語の三つの言語が日常的に使われている。特にシンハラ人、タミル人それぞれにとって、自分の母語と英語がどのように生活の中で使い分けられているのか、社会言語学的に非常に興味深いところである。

通常、マジョリティとマイノリティという二つの言語が存在する社会では（例えばアメリカのような多言語社会）、英語と自分の母語という二言語間の対立が一般的である。しかし、スリランカでは、マジョリティ言語ともう一つ共通語である英語といった二つの優位な言語が同時に存在し、対立している。これは、スリランカの社会構造が生み出す特有の言語状況であり、社会科学的に大変興味深いモデルを作っている。

2. 研究目的

筆者は、シンハラ語母語話者とタミル語母語話者がそれぞれの母語と共通言語としての英語をどのように使い分けしているのかという問題意識に立ち、スリランカにおいてアンケート調査、インタビュー調査および自然会話の録音・録画を実施し、その分析結果を「多言語国家スリランカの言語使用状況」として発表した。

上記の研究成果を踏まえ、本論では、特殊な多言語社会でのそれぞれの言語の使い分けを明らかにすることによって、複雑な言語世界が形成されているスリランカの言語現状を分析し、その実態に迫っていく。

以上の目的を達成するために、本論ではシンハラ語を母語とする家庭とタミル語を母語とする家庭に焦点を絞り、それぞれの家庭で繰り広げられている自然な日常会話でどのように言語が使い分けられているかを調査・分析する。調査・分析にあたっては、おもに英語を組み込み言語（*embedded language*—句、節および文を含む）とするコードスイッチング（以下「CS」）に注目し、それぞれの会話の中でCSがコミュニケーションの手段としてどのような役割を果たしているかを明らかにする。同時に、本論ではタミル語を母語とする構成員とシンハラ語を母語とする構成員が混在する家庭にも注目する。そこでは、タミル語、シンハラ語および英語の3つの言語が使用され、シンハラ語と英語を組み込み言語とするCSが頻繁に行われているためである。

従来の先行研究においては、公的場面におけるCSの分析は例があるが、家庭(私的領域)におけるCSの研究は見られない。したがって、本論では、より日常的な家庭という場面で使用されるCSの分析を通して、スリランカにおける言語使用の社会的背景に迫っていくことにしたい。

3. 考察課題

本論の研究目的に迫る切り口として、以下の三つを考察課題として設定した。

- (1) シンハラ語話者とタミル語話者それぞれの家庭に特有の CS の特徴は見られるか。
- (2) シングル（両親ともにシンハラ人で、家庭内ではシンハラ語と英語を使用している子ども）とダブル（シンハラ人とタミル人の親を持ち、家庭内ではシンハラ語とタミルと英語を使用している子ども）、それぞれそのエスニシティー（文化・言語などの属性の違いに従って分類された人口集団）に対するメンバーのもつ主観的帰属意識、運命共同意識）はどのように違うのか。
- (3) シンハラ語話者とタミル語話者の家庭それぞれにおいて、言語ヒエラルキーと言語アイデンティティーは、どのように存在しているのか。

4. CS の定義と機能

本論においては、Gumperz (1982)による CS の定義と機能を採用し、シンハラ語話者とタミル語話者がいつ、どこで、何のためにコードスイッチを行うか、何が単一の会話の過程で言語間のスイッチを引き起こすか議論する。

(1) Gumperz (1982) は CS を「二つの異なる文法的システムまたはサブシステムに属する発話の節が同じ発話の中で交換される並置」(the juxtaposition within the same speech exchange of passages of speech belonging to two different grammatical systems or subsystems) と定義した。

(2) Gumperz (1982)は、以下の CS の 6 つの主な機能を提案した。

1. Quotation Marking (引用)

直接的な引用や他の人が言ったことを報告するために使われる。

2. Addressee Specification (聞き手の特定化)

複数の聞き手のうち誰か一人にメッセージを向けるときに使われる。

3. Interjection (間投詞・感嘆詞)

間投詞・感嘆詞、あるいはフィラーとして使われることもある。

4. Reiteration (繰り返し)

一つの言語コードで話されメッセージがそのまま、あるいは少し変化をつけてもう一つのコードで繰り返されるということがしばしばある。発話の内容をより明確にさせるために使用される場合もあるが、大半は強調するために用いられる。

5. Message Qualification (メッセージの限定)

文や動詞補語や連結詞のように、話したことを限定する構造を含む。

6. Personalization versus Objectivization (個人化 対 客観化)

このグループは、記述的な方法だけでは特定化することが難しい機能を持つものが含まれる。

- ① 行動についての発話なのか、行為としての発話なのか
- ② メッセージに話し手がどのくらいかかわっているかという度合い
- ③ 発話の内容が個人的な意見なのか、客観的な知識なのか
- ④ ある特定の事柄に関する事柄か、それとも一般的に知られた事実であるか

5. 現地調査の概要

5.1 現地調査の目的

スリランカでは、日常生活デモンストラ語・英語・タミル語の3言語が使用されており、それぞれの言語が状況に応じてコードスイッチング（以下CS）されている。しかし、いつ、どの言語を使用するかは話者の家庭、教育、職場などによって異なり、マジョリティであるシンハラ人とマイノリティであるタミル人の間にも相違があると予想される。そこで、異なる場面でどの言語が使用されているか、年齢や学歴、社会階層による影響があるかを調査した。なお、スリランカ社会では学校教育の場面だけではなく、日常生活においても英語が多く使用される。そこで、本論では、英語の使用実態や浸透状況を調べることにより、英語の必要性及び母語に対する影響についても注目した。

5.2 現地調査の方法

日本でのパイロット調査のデータをもとに、2011年1月20日から同年2月23日までスリランカ全9州のうち、中部州、北中部州、東部州、北西部州、南部州、ウバ州、サバラガムワ州、西部州の8州で総勢525人に対してアンケート調査を行った。さらに、アンケートに協力してくれた調査対象者の中から一つの州約10人を選びインタビューを行った。

5.3 現地調査の結果の考察

現地調査ではどの民族でも、地方、職業、首都に近いかどうかによって、日常生活の中でそれぞれの母語とともにどの程度英語が使用されるのかが決まることが明らかになった。特に西部州、中部州、南部州、ワヤンバ州のシンハラ語話者は、どの場面でも母語シンハラ語と英語の2言語間でCSを行っていることが見られた。また、ウバ州のシンハラ語話者もシンハラ語と英語の2言語を使用しているが、学校や職場場面では、さらにタミル語を含めた3言語を使用している。年配者よりは中年層のシンハラ語話者の方が英語へCSすることが多い。西部州の年配者、特に専門職の人は社会的地位などによる環境の影響で、家族の中でもシンハラ語と共に英語もよく使用する。

また、首都に住んでいる人は様々な階層の人と接触する機会があるため、どの場面でもシンハラ語だけでなく英語を用いてCSをするのが一般的である。しかし、ウバ州のシンハラ語話者は、英語に接触する機会がほとんどないため、祖父母に対してシンハラ語と英語

のCSを行うようなことは見られない。一方、シンハラ語話者は家庭の中で両親や兄弟姉妹とコミュニケーションを行う時も英語とシンハラ語のCSをよく行う。インタビューをした時に、西部州に住んでいるシンハラ語話者の多くはタミル語ができないので、タミル語話者と接触する時に、言語問題が起きると回答した人が多くいた。

家庭内場面では、タミル語話者が祖父母と話す時にはタミル語だけを使用する。しかし、3言語間のCS使用の割合はシンハラ語話者より、タミル語話者の方が多かった。このように、シンハラ語、タミル語、英語間のCSは、母語・場面・地域・民族・年齢によって変化することが分かった。

以上のアンケート結果を踏まえて、スリランカ人の言語使用状況や、それぞれの民族が母語と共に英語をどのように使用しているのか、英語やシンハラ語、またタミル語と英語のCSはどのように行われているのか、3言語をどのように使い分けているのか、などを明らかにするために、次章では様々な場面の自然会話の録音及び録画を文字化し、分析する

また、以上のアンケート調査から明らかになったのは「英語の優位性」である。スリランカ社会では、母語ではなくあえて英語で話すことで自身のプライドを見せようとし、母語以外に英語を使用していると考えられる。そこでは、母語以外に英語を話せることが、より社会的階層の高い仕事に就け、経済的に豊かになれるということとも関係している。英語は自らの母語よりも上位である言語として社会的に認知されていることが、CSを引き起こす原因になっていると考えられる。英語>シンハラ語>タミル語という言語ヒエラルキーの構図という仮説である。さらに、大学教育を受けるか否かによって教育レベルに大きな差が生まれ、大学教育を受けた人は母語以外に英語の使用頻度が多くなることが仮説として導かれる。以上の仮説も次章で検証することにする。

6. 自然会話の調査と分析

6.1 調査方法

スリランカ人が家庭内でコミュニケーションをする際に行うCSを調査するために、2013年1月15日から2月15日、2014年1月25日から2月25日までの2度にわたって、西部州に居住するシンハラ語話者の6家庭とタミル語話者の4家庭の計10家庭を訪問して、家族が全員在宅している時間に自然会話のビデオ録画と録音を行った。録音は各家庭につき1時間行い、得られたデータの中から30分間を文字化した。

6.2 分析方法

本論では、シンハラ語母語話者とタミル語母語話者が、家庭内の場面で、いつどこで何のためにコードスイッチを行うかという、単一の会話の過程で言語間のスイッチを引き起こす理由を明らかにするために、CSの要因を議論する。言語学者はCSの様々な機能につ

いて広範囲な枠組みを提供してきた。本論では、Gumperz(1982)によって提起された 6 つの機能(第 2 章で詳述した)が、収集されたデータにどのように現れているかを分析する。

また、シンハラ語話者とタミル語話者の会話では、Gumperz(1982)が提起した CS の機能では説明しきれない多くの機能が検出された。これらの機能をあらかじめ以下のように取りまとめ、分析の過程でそれぞれの機能がどのように使われているかを明らかにする。

- ・ 親しい間柄を呼ぶ時の CS (お母さん、お父さん、娘、息子)
- ・ 話題の変更の時の CS
- ・ 権威が付与された言葉に対する CS(With Authority)
- ・ 形容詞、挨拶など
- ・ 時間を表す言葉の CS
- ・ 言語習得のために意図的に行われる CS
- ・ 形態素の CS

さらに、Dharmawardhana.H (2008)では、形態学的拡張(morphological extensions)がシンハラ語と英語の CS の機能として使われるとしている。本論の分析からも、形態学的拡張が CS の機能として使われていることが示されており、これも分析の過程で説明を行う。

6.3 結論

本稿の研究課題に対しこれまでの考察で得られた結論をまとめ、その過程で新たに浮上した「親しい間柄を呼ぶ時の CS」の背景に考察を加える。

(1) 研究課題 1: 「シンハラ語話者の家庭と、タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭においてそのコードスイッチングに特有の特徴、差異は見られるのか。」

① CS に使用する言語

シンハラ語話者の家庭では頻繁にシンハラ語から英語に CS するが、タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭では英語への CS の頻度は相対的に少ない。

この要因として、今回の調査は西部州で行ったためにシンハラ語話者の家庭の教育水準が比較的高く、両親は子供に学習させるために英語を頻繁に使用していることが挙げられる。事実、シンハラ語話者の家庭のインタビューでも、「家の中で子供にも自然に英語を話す機会を作っている」と回答している。

一方、タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭では、CS の選択肢がシンハラ語(またはタミル語)と英語の 2 つであり、両親は子供たちが小さいころから、親の母語と英語を状況に応じて使い分けられるように教育している。使用言語について両親に対するインタビューでは、「家庭では子供たちが 2 つの母語を自然に話せるようにしたい」、「タミル語が分からない場合に理解を促すために英語を使用する」と回答している。また、シンハラ語の学校に通っているタミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭の子供たちからは、「父親の言葉も、母親の言葉も大切にしたい」、「2 つの言葉を勉強できるのは家だけ」、「間違っているけど家庭ではできるだけタミル語を使いたい」などの回

答を得ている。会話データからも、これらの家庭では、タミル語かシンハラ語で発話した後には聞き手の理解を促す、或いは、確認するために英語への CS を行っている場面が散見される。また、子供たちは、両親の母語でコミュニケーションがとれない場合に英語への CS を行っていた。

② Gumperz (1982)が指摘している CS の分類に従って分析した結果、以下の CS ファクターが特にはっきりと確認された。

(i) シンハラ語話者の家庭内の場面

- ・メッセージの限定を行う CS
- ・繰り返しの CS
- ・間投詞・感嘆詞の CS
- ・引用の CS

(ii) タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭では、

- ・聞き手の特定化を行う CS
話し手がシンハラ語話者で、聞き手にタミル語話者とシンハラ語話者が混在する場合、発話が聞き手に理解できるようにタミル語に CS をして、聞き手の特定化を行う。
- ・繰り返しの CS
タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭のメンバーはタミルで発話したが、聞き手がきちんと理解していないと判断した際、英語かシンハラ語に CS をしている。

③ Gumperz (1982) が指摘していない CS の種類として、シンハラ語話者の家庭内の会話では以下の特徴的な CS が多くみられた。

- ・挨拶や返答、依頼を表す言葉への CS
スリランカの社会では、おはようございます、おやすみなさい、気を付けて行ってらっしゃい、ありがとうございます、すみません、お願いします、などと挨拶する場合、宗教に従った一定の挨拶表現の習慣がある。しかし、お別れの挨拶（仏様のご加護がありますよう）を例外として、シンハラ語話者はこのような挨拶を英語で行うことが一般的である。一方、タミル語話者の会話では、英語での挨拶はあまり見られない。また依頼をする場合、最後に **please** を加える場面が散見される。
- ・権威が付与された言葉に対する CS(With Authority)
普段の生活から離れた公的な空間で、社会的に権威があると考えられるものに対して使われる言葉は、母語ではなく英語が使われることが非常に多い。特に学校に関連する言葉に多く見られる。School, Teacher, Principal, Sport Meet, Rehearsal, Exam, Film, Exhibition などがその例である。これは他の社会では観察されていないと考えられ、興味深い。

- ・話題の変更の時の CS
- ・接尾辞の CS (形態素の CS)
英語の名詞+シンハラ語の接尾辞と、英語の動詞+シンハラ語の接尾辞の CS。このような CS を Gumperz (1982) は認識していないが、Dharmawardhana (2008) は指摘している。この接尾辞に関する CS は今までの研究では見られなかったもので、シンハラ語話者の会話に特有の特徴だと考えられる。
- ・形容詞の CS (good、bad、jealous)
jealous や sorry など、日常生活に最も密着した感情を示す場面にも英語が登場する。
- ・時間を表す CS(half and hour)

(2) 研究課題 2: 「シングルとダブルそれぞれそのエスニシティーはどのように違うのか。特に、子どもについてはどうか。」

- ① シングルの CS の最も特徴的な点は、エスニシティーよりも、親の教育的な意図が強く現れるということである。親は、子どもの英語習得を家庭内でも促進させようとする傾向にあり、そのためにあえて英語への CS を頻繁に行っていた。その影響により、子ども達も自然と英語をよく使用し、上位言語として英語を重視する傾向が見られた。
- ② ダブルの子ども達は、3つの言語が混じり合う家庭環境下であり、シングルの子に比べ、そのエスニシティーは一見複雑であるように思える。しかし、今回調査を行ったどの家庭においても、ダブルの子ども達は両親のどちらの言語も守りたいと思う傾向が強く、マイノリティであるタミル語も習得できるよう家庭で意識して使用するようにしていた。ここでは、英語への CS は英語習得のためというよりも、家族が円滑にコミュニケーションを取るための一つの方法として行われることが多い。

(3) 研究課題 3: 「シンハラ語話者家庭、タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭、それぞれの家において、言語ヒエラルキーと言語アイデンティティーは、どのように存在しているのか。」

- ① シンハラ語話者の家族では、シンハラ語と英語間での CS が多く、英語>シンハラ語という言語ヒエラルキーが強く働いている。シンハラ語話者の家庭の母親が英語の優位性に則り、頻繁に英語を使用することが、子供達にも影響を与えていると考えられる。
- ② 一方、シンハラ語話者とタミル話者が混在する家庭では、母親がシンハラ語話者であるにも関わらず、あえてタミル語と英語を使用している。そこには父親の母語であるタミル語、つまりマイノリティ言語のアイデンティティーを守ろうとする力が働いている。さらに、子供達もシンハラ語を話せるにも関わらず、その CS 戦略に影響されタミル語

と英語を使用している。この家族のなかでは、メッセージを伝達したい相手の母語に配慮したタミル語>英語>シンハラ語という CS が行われており、英語を上位とするヒエラルキーの構図から相対的に自由な空間が現れている。

つまり、これらの家庭においては、マイノリティ言語のアイデンティティを守ろうとする力が働いていることが読み取れる。これは、公的場面における英語を上位とする言語ヒエラルキー（注；論者は、スリランカにおいてはオフィスや学校といった公的空間では英語への CS、ないしは、社会のマジョリティ言語であるシンハラ語への CS が多用され、マイノリティ言語であるタミル語への CS は少ないと報告している（2012）。）を打ち破る重要な役割を有しているといえる。また、多言語社会の多様性の維持発展のために、生活空間である家庭がいかに重要な場となっているかが示唆されている。

(4) 「親しい間柄を呼ぶときの CS」について

シンハラ語話者とタミル話者に共通する特徴として、母、父、姉、妹、弟などの家族を呼ぶときには、母語以外の言語に CS されている発話の中でも、母語を使用するという興味深い習慣があることが明らかになった。以下その背景を考察する。

(1) シンハラ語話者とタミル語話者が信仰する宗教

下表は、筆者が実施したアンケート調査と同時に行った民族別の母語の使用状況と信仰する宗教に関するアンケート調査をまとめたものである。この結果では、シンハラ語を母語とするシンハラ人の大部分は仏教を信仰しており、タミル語を母語とするタミル人はヒンズー教を信仰していることが示されている。

アンケート調査対象者の母語と信仰宗教

	調査対象者の人数	調査対象者の母語	調査対象者の信仰する宗教
シンハラ族	328	全員シンハラ語	仏教 312 キリスト教 16
タミル族	83	全員タミル語	全員ヒンズー教
ムスリム族	114	全員タミル語	全員イスラム教
計	525		

—第3章 表2 「対象者の民族ごとの人数」より作成—(博士論文参考)

また、自然会話の録画と録音の対象者に行ったインタビュー調査では、すべてのシンハラ語話者の家族(6 家族)では仏教を信仰しており、シンハラ語話者とタミル語話者が混在する家族(4 家族)では、シンハラ語話者は仏教を、タミル語話者はヒンズー教を信仰しているとの回答を得た。つまり、スリランカでは、シンハラ族→シンハラ語→仏教、タミル族→タミル語→ヒンズー教という図式が成立しているのである。

(2) シンハラ語話者とタミル語話者の父母、家族に関する考え方

父母、家族に対する考え方について、自然会話の録画と録音の対象者に行ったインタビュー調査では、すべての対象者から、「家族が信仰する教えを大切にして、祖父母、父母、兄、姉などの目上の人々を尊敬し、弟や妹などの目下の人々を愛するよう幼いころから教育を受けており、この教えを実践するように心がけている」との回答があった。ここでは、「シンハラ族→シンハラ語→仏教、タミル族→タミル語→ヒンズー」という図式にもかかわらず、シンハラ語話者とタミル語話者に共通する父母、家族に関する宗教の教えが受け継がれていることが示されている。

(3) なぜ家族の呼称から CS を排除するか

言語とは「音声または文字を手段として、人の思想・感情・意思を表現・伝達し、また理解する行為」であるとするなら、母を指す「amma」(シンハラ語でもタミル語でも)や、父を指す「tatthta」(シンハラ語)、「appa」(タミル語)は単に家族関係を表す言語ではない。そこには、仏教やヒンズー教の教えを背景とする、尊敬と愛情の対象としての父母に対する思想・感情・意思が込められているはずである。この様な思想・感情・意思がスリランカにおいて引き継がれてきたのは、母を「amma」と呼び、父を「tatthta」や「appa」と呼び続けてきたからではないかというのが筆者の推測である。逆説的に言えば、家族の呼称から CS を排除することによって、家族の宗教的アイデンティティーを保持してきたということになる。

7. まとめ

本研究では、シンハラ語話者の家庭、シンハラ語とタミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭でのそれぞれの CS 戦略の違いが明らかになった。シンハラ語話者の家庭では親子の間でも、シンハラ語の語彙があるにもかかわらず、英語に CS している。CS のこうした側面は、植民地宗主国の言語であり世界の共通語である英語と、母語であり日常言語であるシンハラ語という構図から考えると理解しやすい。このような構図を、言語ヒエラルキーの構図と呼べば、その最も典型的な側面は、「権威を付与された言葉に対する CS」で英語が使用される場面である。

一方、シンハラ語話者とタミル語話者とシンハラ語話者が混在するが混在する家庭では英語>シンハラ語>タミル語という言語ヒエラルキーが家庭内で崩され、言語アイデンティティーへの力が働いていることがわかる。

また、シンハラ語話者の家庭でも、タミル語話者とシンハラ語話者が混在する家庭でも、家族のメンバーに呼ぶ際には、母、父、息子、娘、祖父、おば、おじ、などの親しい間柄を示す言葉を母語で使用するのが共通する特徴である。その背景には、スリランカにおける宗教的要因があるというのが筆者の推論である。

8. 今後の課題

本稿はスリランカのシンハラ語話者の家庭と、シンハラ語話者とタミル語話者が混在する家庭における言語使用状況を CS に焦点をあてて分析を行った初めての試みである。

今回の調査はスリランカの西部州を対象にしており、シンハラ語話者と結婚しているタミル語話者を調査対象者としたが、タミル語話者のみの家庭であれば違うデータが得られたかもしれない。また、西部州での教育レベルならびに社会階層が比較的高い家庭を調査対象としたために、シンハラ語話者の家庭では、英語を頻繁に使用する結果が見られた。加えて、今回の調査では、タミル語話者の家庭の調査対象が少なく、データも不十分であったために、シンハラ語話者とタミル語話者の家庭を十分に比較・検討したとは言えない。

以上により、今後、より多くのシンハラ語話者とタミル語話者の家庭での会話データを収集し、CS の機能に関する研究を掘り下げて、シンハラ語話者とタミル語話者の家庭における CS の全体像を明らかにすることが今後の課題である。

また、家族を呼ぶときに、母語以外の言語に CS されている発話の中でも、母語を使用するというシンハラ語話者とタミル語話者に共通する特徴については、その背景に宗教的要因があるというのが筆者の推論である。この推論の正当性については、今後より詳細な実証研究を継続いたしたい。

同時に、現在スリランカ社会が直面している英語重視、母語軽視の加速化とそれに伴う、スリランカの文化と社会基盤の崩壊の動向を注視していきたい。

Language Usage Situation in a Multilingual Nation- Sri Lanka
—Code Switching used for calling family members in Sinhalese and Tamil families—

SUMMARY

1. Introduction

In my thesis under the title of “Language Usage Conditions in a Multilingual Nation - Sri Lanka—Code Switching at the Families made up of Sinhalese native Speakers and Tamil native Speakers — ” I clarified the strategic difference of Code Switching(“CS”) between families of Sinhalese speakers and families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers.

In families of Sinhalese speakers I found a common phenomenon where they use English language in their daily conversation even if they have corresponding Sinhalese vocabularies. I interpreted the phenomenon as the linguistic hierarchy structure prevailing in Sri Lankan society setting English at the top, Sinhalese next and Tamil at the bottom.

In families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers, however, I found a free conversation space liberated from the linguistic hierarchy and a power of linguistic identity of their own language is predominantly working.

Despite this fundamental difference of linguistic strategy between each type of families, I noticed a common feature in both type of families where all family members use their own native languages when they call other members of family in intimate relation such as mother, father, son or daughter, and defined the feature as “CS used for calling family members.”

Furthermore, I presumed that there is a religious background peculiar to Sri Lankan society behind “CS used for calling family members” and rendered an examination of this presumption for future study.

2. Study Subject

The study subject of this paper is to examine the presumption that there is a religious background peculiar to Sri Lankan society behind “CS used for calling family members.”

3. Method of Examination

During the period from January 6 to 12 of this year I conducted a field survey by interviewing with 10 persons (6 females and 4males and all) from families of Sinhalese

speakers, and 5 persons (3 females and 2 males) from families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers . The following questions were prepared as questionnaire entries in the interviews

- (1) Which language do you use in your daily life ?
- (2) Which language do you use to communicate with your family members?
- (3) Which language do you use when you call your family members?
- (4) Which language do you use when you call your mother and father?

4. Results of Interviews

(1) All persons from families of Sinhalese speakers;

- ① are believers in Buddhism,
- ② use Sinhalese and English to communicate with their family members,
- ③ use Sinhalese when they call their family members,
- ④ use Sinhalese when they call their mother and father.

(2) Persons from families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers;

- ① are believers in Hinduism,
- ② usually use Tamil and English but sometimes Sinhalese to communicate with their family members,
- ③ use Tamil but sometimes Sinhalese when they call their family members,
- ④ use Tamil but sometimes Sinhalese when they call their mother and father.

Here, Sinhalese is sometimes used when a conversation partner's native language is not Tamil.

5. Conclusion

(1) I assumed in my previous thesis that in Sri Lanka there is a linkage which unites races, languages and religions, namely "Sinhalese race →Sinhalese language →Buddhism" on one hand and "Tamil race→Tamil language→Hinduism" on the other. However, the result of the above interview revealed that the assumption was an over-simplification in families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers. Because the linkage turned out to be loosen due to a co-existence of both races in the same family.

(2) I defined "CS used for calling family members" by assuming that all family members use their own native languages when they call other members of family in intimate relation. Here again, this assumption was an over-simplification. In families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers they sometimes use the native language of a conversational partner even if it is not their own native language.

(3) From the interviews “special status of mothers” came on stage as a common feature in both types of family. They usually use their native language when they call their fathers and mothers (“tathta” and “amma” in families of Sinhalese speakers and “appa” and “amma” in families of a mixture of Sinhalese and Tamil speakers) to express their respect and love to their parents. However, they feel that “amma” has a special meaning as an indispensable creature of their family members, therefore as the most valuable object of respect and love. In Buddhism there is a lesson saying “gedara budhun amma” which means “amma” is a family Buddha. In Hinduism there is a similar lesson teaching “amma” is a God in family. It seems that they create and maintain a sense of affinity to and identity as Sri Lankan people by using “amma” when calling their mothers.

(4) Although it is certain that there is a religious background peculiar to Sri Lankan society behind “CS used for calling family members,” it is not certain whether this CS originated only from the religious background or from social value shared in Sri Lankan society such as love and respect to their mothers grown independent from the religious aspect.

参考文献

日本語文献

- ・サジーワニー, ディサーナーヤカ (2012) 「多言語国家スリランカの言語使用状況」 中川裕編『ユーラシアの多言語社会と言語政策』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第239 集、pp. 21-72
- ・サジーワニー, ディサーナーヤカ (2014) 「シンハラ語話者とタミル語話者の家庭での会話におけるコードスイッチング」 『人文社会科学研究所』第28号2014年3月、pp. 117-136
- ・サジーワニー, ディサーナーヤカ (2014年) 「多言語国家スリランカの言語使用状況ーシンハラ語話者とタミル語話者のコードスイッチングー」 千葉大学人文社会科学研究所, 2014

英語文献

- Abe, Akiko(1989)“ A Sociolinguistic Survey In Asian English in Contact” 『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』第2 号, pp.135-156
- Bokamba, E. (1988)“Code-mixing, language variation, and linguistic theory: Evidence from Bautu language”, *lingua*, 76, pp.21-623
- Coperahewa, Sandagomi(2009)“ The language planning situation in Sri Lanka” Department of Sinhala, Faculty of Arts, University of Colombo, Colombo 3, Sri Lanka
- Chamindi Dilkushi Senaratne(2009) “Sinhala-English code-mixing in Sri Lanka A sociolinguistic study”, *LOT*
- Dharmawardhana.H(2008)“A Study of Code Switching in Sri Lankan Radio Discourse” Department of English, Faculty of Arts, University of Colombo
- Dua, H.R.(1996)“ The politics of language conflict: Implications for language planning and political theory.” *Language Problems and Language Planning*, 20(1), pp.1-17.
- Fernado, Chitra(1977)“English and Sinhala bilingualism in Sri Lanka” *Language in Society*. 6, pp.341-360,
- Fernado, Chitra(1989)“English as problem and resource in Sri Lanka Universities.” *English across Cultures culture across English: A Reader in Cross-cultural Communication. Ofelia Garacia and Ricardo Otheguy. Ed.* Berlin. New York: Mouton de Gruyter.
- Grosjean, G(1982) *Life with two languages*, MA: Harvard University Press.
- Gumperz, J.J.(1982)“Conversational code switching”, J. Gumperz (Ed.) , *Discourse strategies*, Cambridge: Cambridge University press pp.59-99 (井上逸兵ほか訳 (2004) 『認知と相互行為の社会言語学』松柏社)
- Myers-Scotton, C(1990)“ Codeswitching with English: types of switching, types of communities”, *WorldEnglishes*, 8, pp.333-346
- Nishimura, M(1995)“A functional analysis of Japanese/English code-switching” *Journal of Pragmatics*, 23, pp.157-181
- Poplack, S(1980)“ Sometimes, I'll start a sentence in Spanish, termino en Espanol: toward a typology of codeswitching”, *Linguistics* 18. pp. 518-618
- Sridhar, K. & Sridhar, K(1980)“ The syntax and psycholinguistics of bilingual codemixing”, *Studies in the linguistics Sciences*, 10, 203-215
- Siromi Fernando(2003) “THE VOCABULARY OF SRI LANKAN ENGLISH : WORDS AND PHRASES THAT TRANSFORM A FOREIGN LANGUAGE INTO THEIR OWN”, *9th International Conference on Sri Lanka Studies Full Paper Number 026*

- Wiley, T.G.(1996).“ Language planning and policy”. S.L. McKay & N.H. Hornber (Eds.), *Sociolinguistics and language teaching* Cambridge University Press. pp.103-147__
- Bakker, P. (2006). The Sri Lanka *Sprachbund*: Thenewcomers Portuguese and Malay. In Y. Matras, A. McMahon & N. Vincent (Eds.), *Linguistic Areas – Convergence in Historical and Typological Perspective* (pp.135–159). Houndmills, New